

変化するリアリズム—ネオクラシカル・ リアリズムの“発見”（上）

島 村 直 幸

ネオクラシカル・リアリズムは、国家の対外政策の範囲と野心は第一義的に国家の相対的な物理的パワーによって規定される、と主張する。しかし同時に、対外政策に対するパワーや能力のインパクトは、間接的で複雑である、と主張する。なぜならば、システム上の制約は、政策決定者の認識や国家構造といったユニット・レベルの媒介変数を通じて“翻訳”されるからである (Rose, 1998: 146)。

ギデオンのローズ「ネオクラシカル・リアリズムと対外政策の理論」(一九九八年) 第三イメージは、世界政治の枠組みを説明するが、第一イメージと第二イメージなしには、政策を決定する諸力についての知識を獲得することはできない。第一イメージと第二イメージは、世界政治の諸力を説明するが、第三イメージなしには、それらの重要性を評価したり、それらの結果を予測したりすることは不可能である (Waltz, 1959: 238)。

ケネス・ウォルツ『人間、国家、戦争』(一九五九年)

一 ネオクラシカル・リアリズムの“発見”

(1) ネオクラシカル・リアリズムとは何か

ネオクラシカル・リアリズム (neoclassical realism、新古典的現実主義)

とは何か―。ネオクラシカル・リアリズムは、序章でも簡単に見たが、ネオリアリズムと同じく、「国際システム・レベルの構造的要因（特に「力の分布」）が国家の対外政策を規定する」とまず想定する。しかし同時に、国内レベルの要因や個人レベルの要因（国家指導者の認識や誤認なども含む）を媒介変数として位置づける。ネオクラシカル・リアリズムを“発見”したのは、ローズである。ローズが、『世界政治』誌の書評論文で使用して、この用語が広まった。ネオリアリズムと古典的リアリズム（classical realism）の両者の特性を有することから、「ネオクラシカル・リアリズム」と名づけられたのである。ローズ論文は、一九九〇年代のネオリアリズムの変容を、ネオクラシカル・リアリズムの誕生を軸にして整理した内容であった（Rose, 1998: 146; 2010; Freyberg-Inan, Harrison, James, eds., 2009）。

ウォルツをはじめとしたネオリアリズムの理論では、特定の国家の対外政策について説明し切れないことが比較的早い段階から明らかになっていた。こうした欠点を補う形で、一九九〇年代以降、国内レベルと個人レベルの要因も重視するネオクラシカル・リアリズムのアプローチが現れたのである。ネオクラシカル・リアリズムは、ネオリアリズムやその発展形態である攻撃的リアリズム（offensive realism）と防御的リアリズム（defensive realism）に批判的な論調をとるリアリストたちの議論のなかから形成されてきた。

ネオクラシカル・リアリズムを“発見”したローズがネオクラシカル・リアリストとして特に取り上げている人物は、たとえば、ザカリアやウォルフフォース、シュウェラー、クリステンセンである（Rose, 1998）。レインやデュエックも、ネオクラシカル・リアリズムであることを自任している（Layne, 2007; Dueck, 2006）。ローズ自身、『終戦論』を残している（Rose, 2010）。ロベルとリップスマン、タリアフェロ編集の論文集、トジェとカンズ編集の論文集もある（Lobell, Ripsman, and Taliaferro, eds., 2009; Toje and Kunz, eds., 2012）。二〇一〇年代にも、ローズやトジェとカンズ編集の論文集以外にも、リップスマンとタリアフェロ、ロベルの共著をはじめとして、研究業績が蓄積されてきた（Ripsman, Taliaferro, and Lobell, 2016;

Rosa, 2018; Ichihara, 2017; Hadfield-Amkhan, 2010; Brawley, 2010; Dyson, 2010)。ネオクラシカル・リアリズムについての比較的最近の批評として、国内政治要因に着目したナリズニィ論文がある (Narizny, 2017)。

ネオクラシカル・リアリズムは、繰り返しになるが、ネオリアリズムが主張する通り、「国際システム・レベルの構造的要因が国家の対外政策を規定する」という立場にまず同意する。しかし同時に、ネオクラシカル・リアリズムは、国内要因や個人レベルの要因に着目していた古典的リアリズムの考え方も取り入れるのである。ネオリアリズムは、たとえば、国家の政治制度 (民主主義国家か権威主義国家かなど) や政策決定者たちの認識・誤認などは国家の対外行動に影響しない、と捉えている (Waltz, 1979; Gilpin, 1981; Jervis, 1976; Snyder, 1997; 1984; Grieco, 1990; Miller, 1995; Gllaser, 1994/1995)。これに対して、古典的リアリズムは、国家の政治制度や国家指導者の認識・誤認が国家の対外行動に影響する、と考えてきた。古典的リアリズムには、たとえば、カーやモーゲンソー、アロン、キッシンジャー、ウォルファース、ハーツなどがある (Carr, 1964; Morgenthau, 1978; Aron, 2003; Kissinger, 1957; Wolfers, 1956; 1962; 1966; 1976; Herz, 1959)。ドイツは、古典的リアリズムの源流として、マキャベリの「原理主義」、ホッブスの「構造主義」、ルソーの「立憲主義」を挙げた上で、トゥーキュディデースを「複合的」リアリズムと位置づけた (Doyle, 1997)。

(2) 媒介変数としての国内・個人要因

ネオクラシカル・リアリズムは、構造的要因が、たとえば、国内の政治制度や政策決定者たちの認識・誤認などを“経由”することになるため、構造的要因の影響は“間接的”である、と想定する。たとえば、クリステンセンによれば、一八六〇年代のヨーロッパ地域ではビスマルクの下、プロイセンがパワーを急速に強大化していた。プロイセンは一八六六年六月、オーストリア帝国との戦争 (普墺戦争) を開始する。当時のフランス皇帝ナポレオン三世は、プロイセンのパワーを十分に認識できず、普墺戦争でオーストリア

が敗北するとは想定していなかった。ネオリアリズムの理論にしたがえば、フランスは、自国とプロイセン、オーストリアの力の分布を理解できて、オーストリアと連携することでプロイセンへのバランスング行動を試みたはずである。しかしながら、現実にはナポレオン三世は、プロイセンのパワーを過小評価していたため、オーストリアとの連携強化、同盟形成という選択肢を見過ごしてしまったのである (Christensen, 1996: 22; 1997)。その後、より強大化したプロイセンは、一八七〇年七月一九日からフランスと戦い (普仏戦争)、フランスを短期戦で打ち負かし、翌年の一月一八日にドイツの統一を成し遂げることとなる (普仏戦争は、五月一〇日のフランクフルト条約で正式に終戦した)。このことは、ヨーロッパ地域の勢力均衡 (BOP) を根底から揺さぶり、第一次世界大戦の勃発の遠因となっていく (Joll and Martel, 2007: 1)。

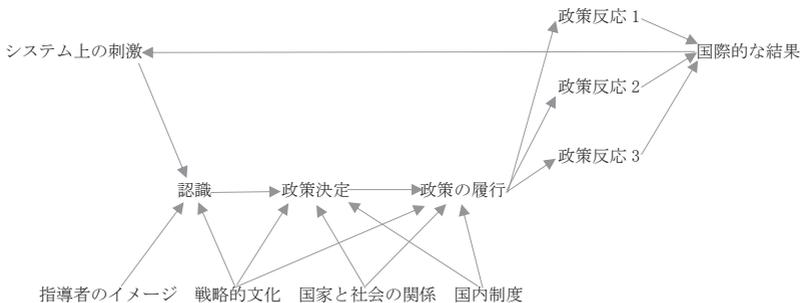
冷戦の開始と冷戦の終結の時期は、アメリカがそれぞれ第二次世界大戦と冷戦に勝利し、新たな馴染みのない脅威に直面した歴史的な瞬間であった (Wohlforth, 1999; 2002)。第二次世界大戦後の双極の国際システムの構造は、リアリズムとリベラルな国際主義の目的と手段が入り混じった「封じ込め」政策の立案と遂行をうまく説明できない。論理上、ヨーロッパ地域の勢力圏を相互に認め合った上での競争的協調という代替案も想定できるからである (Friedberg, 2000: esp. chap. 2; Jervis, 1996: 118-122; Layne, 2007; Dueck, 2006)。また、ネオリアリズムも「民主主義による平和 (democratic peace)」論も、冷戦の終結後の一九九〇年代に、共和党のブッシュ・シニア政権と民主党のクリントン政権が、(少なくとも短期的には) 大国の競争相手もなかっただけではなく、「平和の配当」の国内政治上の制約にもかかわらず、ヨーロッパ地域と東アジア地域で影響力を維持し、むしろ強化・拡大させようと試みたことをうまく説明できない (Mearsheimer, 2014; 1990; 1994/1995)。

二〇〇一年「九・一一」同時多発テロ攻撃後の W・ブッシュ政権のグランド・ストラテジー (大戦略) も、相対的なパワーや対外的な脅威レベルでの転換だけではうまく説明できない。たしかに、共和党政権であろうが民主党

変化するリアリズム—ネオクラシカル・リアリズムの“発見” (上)

政権であろうが、テロリスト集団であるアルカイダをかくまっていたアフガニスタンのタリバン政権に対する攻撃はなされたはずである。しかし、「先制 (pre-emption)」を打ち出したブッシュ・ドクトリンやイラク戦争、民主主義の促進 (promotion of democracy) を通じて中東地域でイスラーム教原理主義のテロリズムを一掃しようと試みたことは、国際システム・レベルとユニット・レベルの要因が混じり合った結果であった。対外的な脅威とアメリカの圧倒的なパワーがアメリカの軍事的な反応の要因を大きく規定しつつも、国家安全保障に高い優先順位を置いていたホワイトハウスや政権内の新保守主義 (neoconservative: ネオコン) のブレーンたちと彼らの単純明快な政策の選択肢、ウィルソニアンのあるいはリベラルな) 対外政策の言説といったユニット・レベルと個人レベルの要因が、アメリカの軍事的な反応の性格と立場を決定づけた (Jervis, 2005: chap. 4; Kaufmann, 2004; Monten, 2005)。

こうして、ネオクラシカル・リアリズムによって、国際システム・レベルの構造的要因は重要ではあるが、国内レベルの構造を経由するため、あるいは国家指導者がうまく認識できないことにより、必ずしも“直接的に”影響を及ぼせるわけではない、と指摘される。ネオリアリズムのウォルツ自身も、彼の理論は、「対外政策の理論」ではなく、「国際政治の理論」であり、国際



出典: Ripsman, Taliaferro, and Lobell (2016: 59)

図1 対外政策のネオクラシカル・リアリストの理論

システム上の結果の幅広いパターンをただ説明しようとする試みである、と繰り返し主張していた (Waltz, 1979: 39, 48-49, 58-59, 64, 71-72, 78, 87, 121-123; 1986: 328, 339-340; 1996: 54-57)。同時に、ウォルツは、「対外政策の理論」は、ユニット・レベルと国際システム・レベルの変数を含みうるし、含むべきである、と論じている (Waltz, 1959: 165-166; Waltz, 1967)。

一九九〇年代における国際関係論 (IR) の変動は、ネオリアリズムやネオリベラリズムの合理的な理論に対抗した形でのコンストラクティヴィズム (構成主義、構築主義) の台頭がまず挙げられる。規範やアイディア、アイデンティティ、思想、文化など“目に見えない”側面に注目するアプローチである。キーワードは、“間主観的な (inter-subjective)” ダイナミズムである。また同時に、国内政治や比較政治、国際法との連結・連関への学際的な関心のさらなる増大などによって特徴づけることができる。さらに、こうした動きと同時並行的に、またお互いに影響し合いながら、ネオリアリズムもまた大きく変容しつつあったのである。つまり、ネオクラシカル・リアリズムの“発見”ないし誕生である。

二 ネオクラシカル・リアリズムと分析レベル

(1) ローズ論文とネオクラシカル・リアリズムの“発見”

ローズ論文は、冒頭で、これまでネオリアリズムが理論的な“簡潔さ (parsimony)”と“洗練さ (refinement)”と引き替えに捨象してきた、特定の国家の対外政策に関するより立ち入った分析を行う試みとして、以下の四つのアプローチを取り上げる。第一に国内政治理論 (innerpolitik theories)、第二に攻撃的リアリズム、第三に防衛的リアリズム、第四にネオクラシカル・リアリズムである (Rose, 1998: 146; Grieco, 1997: 166-167; Walt, 1998: 37)。

まず国内政治理論であるが、これは国内の特に政治体制が対外政策を決定すると想定するアプローチである。この典型的な理論は、「民主主義による

平和 (democratic peace)」論である。ドイツやラセットの議論が典型的である (Doyle, 1983a; 1983b; 1997; Russett, 1993; 2001; Moravcsik, 1997)。ローズは、国内政治理論の欠点として、国内で類似した政治体制を持つ国家が異なる行動をとること、異なる政治体制を持つ国家が類似した行動をとることを十分に説明できないことを指摘する (Rose, 1998: 148)。

次に、攻撃的リアリズムは、ホッブス的な無政府状態 (アナーキー) を前提とし、国内要因を軽視して、国際システム上の制約が安全保障を高めようとする国家を刺激して攻撃的にする、と想定する議論である。あらゆる国家が、機会があれば、相対的なパワーの増大を図り、潜在的な敵対国の影響力を削ぎ、地域覇権ないしグローバルな覇権を目指すという。『大国政治の悲劇』をまとめたミアシャイマーが典型的である。ミアシャイマーによれば、二一世紀、米中の対立は不可避である、と予測される (Mearsheimer, 2014: esp. chap. 10; 1994/ 1995: 337 [fn. 24] ; James, 2009; Colins, 2009)。ローズによると、攻撃的リアリズムの欠点は、第一の国内政治理論と同じく、類似した制約を受けている国家が異なる行動をとること、異なる制約の下にある国家が類似した行動をとることを十分に説明できないことにあるという (Rose, 1998: 148-149)。

第三の防衛的リアリズムは、国内政治理論と攻撃的リアリズムのいわば折衷的な形態である。無政府状態を比較的“緩く”想定し、国家は「安全保障のディレンマ」が過度に高まる時に限って、攻撃的リアリズムのような行動をとるのであって、通常はバランスを保とうとする、と想定するアプローチである。防衛的リアリズムは、国家の対外政策を、システム上の制約に対応した結果としての行動 (natural conduct) として説明できる場合と、国内政治や個人レベルの要因にも基づく行動 (unnatural conduct) として説明できる場合とに分ける。防衛的リアリズムとしては、ヴァン・エヴァラ、ウォルト、ジャック・スナイダー、ポーゼン、グラセルがいる (Zakaria, 1995: 476 fn. 34; Colins, 2009)。ローズ論文は、こうした防衛的リアリズムのアプローチに一定の評価を下しつつも、対外政策の決定要因間の関係を都合よく

使い分けようとする点を、理論的な一貫性を欠くものとみなして批判する。“後づけの (ad hoc)” 理論ではないかというのである (Rose, 1998: 148-151)。

第四のネオクラシカル・リアリズムは、対外政策の決定要因を、第一義的には国際システム上の制約に求める。しかし同時に、国際システム上の制約を国家がいかにか“翻訳 (translate)”するかという点において、さらに実際にどの程度パワー・リソースを“動員 (mobilize)”しうるかという点において国内要因を重視する、というアプローチである。ネオクラシカル・リアリズムは、国際システムの無政府状態を不確実で、“あいまい (murky, ambiguous)”であると前提し、対外政策の目的を狭い意味での安全保障の確立と捉えない (Rose, 1998: 151-152, 166-168; Ripsman, Taliaferro, and Lobell, 2016; Brown, Lynn-Jones, and Miller, eds., 1995; Buzan, Jones, and Little, 1993)。

こうして、ネオクラシカル・リアリズムは、対外政策を異なる政策決定者

表1 対外政策の4つの理論

理論	国際システム観	ユニット観	因果関係の論理
国内政治理論	重要ではない	高度に区別される	国内要因→対外政策
防衛的リアリズム	時に重要; 無政府状態の インプリケーション は変化する	高度に区別される	システム上の or 国内要因→対外政策 インセンティブ
ネオクラシカル・リアリズム	重要; 無政府状態はあいまい	区別される	システム上の →国内要因→対外政策 インセンティブ (独立変数) (媒介変数)
攻撃的リアリズム	とても重要; 無政府状態は ホブズの	区別されない	システム上の→対外政策 インセンティブ

出典: Rose (1998: 154).

がシステム上の制約を“主観的に”解釈し、異なる国内政治の構造に起因する動員能力に規定される形で遂行されるものと捉えるのである。ローズ論文は、ネオクラシカル・リアリズムを構造主義をとる純粋なネオリアリストとコンストラクティヴィストの中間に位置する、と位置づける (Rose, 1998: 152)。コンストラクティヴィズムがリアリズムの変容に影響を及ぼしてきたのである (Sterling-Folker, 2002; 2004)。タリアフェロとロベル、リップスマンの論文によれば、ネオクラシカル・リアリズムは、パットナムの二レベル・ゲームズの論理とも無関係ではない (Taliaferro, Lobell, and Ripsman, 2009: 7; Ripsman, Taliaferro, Lobell, 2016; 島村、二〇一八、一五、一二四頁)。

こうしたネオクラシカル・リアリズムの一九九〇年代の理論家として、すでに見た通り、ローズ論文で、ザカリアやウォルフォース、シュウェラー、クリステンセンなどが取り上げる。また彼らは、ネオクラシカル・リアリズム的分析の「第三の波」と位置づけられる。

「第一の波」は、ギルピンやケネディ、マンデルバウムら先駆者たちであるという。彼らの研究は、いわゆる「大国の興亡」の議論であり、長期的な国際政治の変化を大国の経済力の高低で説明するものである。大国の相対的なパワーは変化するものであり、その相対的なパワーの基礎となる経済力と軍事力の間には、長期的な観点では相関関係がある という分析であった。ネオリアリズムでは相対的なパワーの変化によるダイナミズムの分析がなされることが少ないが、ネオクラシカル・リアリズムの「第一の波」の研究では相対的なパワーの変化と国際システムについて分析している。ギルピンの議論については、序章でも取り上げた (Rose, 1998: 155, 165; Gilpin, 1981; Kennedy, 1989; Mandelbaum, 1981)。

これに続く「第二の波」は、フリードバーグやレフラーである。彼らの研究は、相対的なパワーの変化が国家の対外政策の変化を引き起こす過程について歴史的な記述を試みた。たとえば、フリードバーグの主張は、適切な説明を行うためには単に相対的なパワーの変化を考慮するのではなく、組織的な

いし国内政治的な要因も考慮すべきであるというものである。また、レフラーの主張の最も重要な点は、パワーの変化が対外的な脅威や国益、そして機会に対する政策決定者たちの認識・誤認を引き起こすことを明らかにしたことである (Rose, 1998: 155-156, 158, 164; Friedberg, 1988; 2000; Leffler, 1992)。

ウォルトが『同盟の起源』で問題提起した「脅威の均衡 (balance of threat)」も、目に見えるパワーではなく、目に見えない脅威に注目した点で、ネオクラシカル・リアリズムやコンストラクティヴィズムのアプローチと無関係ではない、と思われる (Walt, 1987; 2005)。たとえば、「歴史の教訓」の重要性を描いた歴史家のメイの研究業績も、ネオクラシカル・リアリズムに影響を及ぼしたかもしれない (May, 1975)。ジャーヴィスの先行研究も無視できない。ジャーヴィスによれば、国家は国際システムのインセンティブに一致した行動を常にとるわけではない。国家は、ネオリアリストたちが「適切な」形式とみなす方法で国際システムの刺激に常に反応するわけではないのである。またジャーヴィスは、たとえ国家が国際システムのインセンティブを適切に理解したとしても、国家の指導者たちは常に国際システムのインセンティブに合理的に反応するわけではない、とも指摘する (Jervis, 1976; 1996; 2017)。ネオリアリストのウォルツが、意外にも国家の合理性の前提に深いこだわりを持っていなかったことも指摘しておく必要がある (Waltz, 1979: 118; 1986: 330-331; Kahler, 1998: 924-925)。

ローズ論文は次いで、国内政治構造の問題や政策決定者の認識・誤認の問題をネオクラシカル・リアリズムがどのように分析するかを紹介した上で、ネオクラシカル・リアリズムの分析の特徴と、ネオクラシカル・リアリズム的分析を進めていく際の注意点を整理する (Rose, 1998: 165-168)。結論部分では、システム・レベルの要因とユニット・レベルの要因との関連、また相対的なパワーの変化とアイデアとの関連など、今後さらに深められていくべき点をまとめている (Rose, 1998: 168-172)。

(2) ローズ論文の評価

こうしたローズ論文を書評した芝崎厚士によれば、ネオクラシカル・リアリズムの意義は、以下の通りであるという。「これまでに登場した理論的立場を整理し、その対比において登場したネオクラシカル・リアリズムは、たしかにそれら先行理論の欠点をかなりの程度克服したものだといえる。国内政治理論やコンストラクティヴィズムへの大胆な接近も、従来のネオリアリズムとは一線を画した姿勢である。ローズも述べるように、理論的な簡潔さと複雑な要因を説明する能力とを可能な限り同時に追求することは、社会科学一般に共通する課題である。当事者のアイデンティティと研究者の分析概念を峻別しつつトータルに分析しようと試み、外交史研究者顔負けのマルチ・アーカイヴァルな史料渉猟に取り組むネオクラシカル・リアリズムの人々の努力は、モナディックな世界観の持ち主とされてきたリアリストが多文化主義・多言語主義的な観点を視野に入れ始めたという意味でも、高く評価しなければならない」(芝崎、二〇〇〇、八一—八二)。

次いで、ネオクラシカル・リアリズムの課題について、以下のようにも指摘される。「ローズは、ネオクラシカル・リアリズムはリアリスト・パラダイムの核となる概念や前提を棄てることなく、現実の世界へより一層近づくことを可能にすると述べているが、これは本当であろうか。たしかにネオクラシカル・リアリズムは、システム要因やアナキーといった概念や前提を『棄てて』はいないが、大幅に変更している。その変更の度合いはリアリスト・パラダイム自体を結果として破綻させるような性格を帯びているようにさえ見えるし、さらに言えばリアリスト・リベラリスト・コンストラクティヴィストというような区別さえ無化してしまう含意をも持つ。リアリズムにおけるこうした変容は、現実を説明する能力を高めることによってパラダイム間の差違が実質的に無意味となり、新たな国際関係研究の視座が再構築される可能性の一端をも示しているといえるだろう」(芝崎、二〇〇〇、八二; Rosow, 2019)。

ネオクラシカル・リアリズムのアプローチは、コンストラクティヴィズムや国際関係史、外交史の研究のアプローチにますます近づいているのか。

ローズによれば、ネオクラシカル・リアリズムとは、古典的リアリストたちの思想から得られる洞察を修正し体系化して、国際システム・レベル（ウォルツが言うところの第三イメージ）と国内レベル（第二イメージ）の変数の両方を取り入れることを試みたものである。さらにネオクラシカル・リアリズムは、個人レベル（第一イメージ）の変数、たとえば、政策決定者たちの認識・誤認まで議論に組み込もうとする。古典的リアリズムは国内レベルと個人レベルの変数で、ネオリアリズムは国際システム・レベルの変数で国際システムを説明することを試みるアプローチであるのに対して、ネオクラシカル・リアリズムは国際システム・レベルとユニット・レベル・個人レベルの変数の両方を含む理論となっている。この点に関しては、防御的リアリズムも両方のレベルの変数を分析しているが、ネオクラシカル・リアリズムと防御的リアリズムでは、国際システム・レベルとユニット・レベル・個人レベルの変数の相互関係に対する捉え方が異なる（Rose, 1998: 153-154; George and Bennet, 2005）。

再びローズによれば、繰り返しになるが、ネオクラシカル・リアリストたちは、国家の対外政策を決定づけるものは国際システム、とりわけ相対的なパワーという変数が理論の出発点であると捉える。ネオクラシカル・リアリズムの理論では、ユニット・レベルの国内要因や個人レベルの要因ではなく、あくまでも国際システム・レベルの構造的要因が独立変数として位置づけられるのである。他方で、古典的リアリズムでは、独立変数は国際システム・レベルの構造的要因ではなく、ユニット・レベルの国内要因や個人レベルの要因が独立変数として設定されている。こうして、ネオクラシカル・リアリズムと古典的リアリズムは論理の出発点が異なると言える（Rose, 1998: 153-154）。

しかしながら、ネオクラシカル・リアリストたちは、国家の対外政策に対する国際システム・レベルの構造的要因の影響力は“間接的”であり“複

雑”である、と想定する。なぜならば、国際システムの変数は必ず、すでに見た通り、ユニット・レベルと個人レベルの要因の媒介変数を通じて“翻訳”されるからである。ネオクラシカル・リアリストたちの理論では、独立変数は国際システム・レベルの構造的要因であって、ユニット・レベルの国内要因もしくは個人レベルの要因は媒介変数ということになる (Rose, 1998: 146, 153-154; Taliaferro, Lobell, and Ripsman, 2009: 19-22; Toje and Kunz, 2012: 4; Ripsman, Taliaferro, and Lobell, 2016; Reichwein, 2012; Kunz and Saizmn, 2012)。ネオクラシカル・リアリズムは、相対的な物質的なパワーが独立変数として国家の対外政策の基本的な決定要因を構成すると主張するが、物質的なパワーが対外政策へ“直接的”もしくは“完全に”転換されない、と想定する。なぜならば、対外政策の決定は実際の政策決定者やエリートたちによってなされるため、単純に相対的なパワーの物理的な量が重要なのではなく、彼らの相対的なパワーに対する認識・誤認が重要だからである (Rose, 1998: 157-158)。こうして、ネオクラシカル・リアリズムは、すでに見た通り、国際システム・レベルの構造的要因を重視するネオリアリズムと、個人の認識・誤認や規範やアイディア、アイデンティティ、思想、文化などを重視するコンストラクティヴィズムの中間の位置を占めていると考えられる。

他方で、ネオリアリズムと攻撃的リアリズムは、国際システム・レベルの変数を中心に議論し、防御的リアリズムは国際システムのレベルと国内レベルの変数をそれぞれ独立変数として扱う。ネオクラシカル・リアリズムは、国際システムの構造的要因を独立変数に位置づけると同時に、国内レベルと個人レベルの要因を媒介変数として位置づける。こうして、ネオクラシカル・リアリズムとネオリアリズム、攻撃的リアリズム、防御的リアリズムとでは、因果関係の論理構造が異なるのである (Rose, 1998: 153-154)。

三 ネオクラシカル・リアリズムと独立変数としての国際システム

ローズが「第三の波」のネオクラシカル・リアリストとして取り上げたザカリアやウォルフォース、シュウェラー、クリステンセンらの研究は、いかなるものか。自らをネオクラシカル・リアリストであるとみなしているレインやデウエックの研究も、無視できない。彼らのネオクラシカル・リアリズムは、これまで見てきた通り、ウォルツのネオリアリズムに代表されるような国際システム・レベルの構造的要因を説明する理論ではない。ネオクラシカル・リアリズムは、厳密な意味において「国際政治の理論」ではないということである。たとえば、ザカリアも、自身の理論は国際政治の理論ではなく、「対外政策の理論」であると捉えている (Zakaria, 1995; Rose, 1998: 145, 168)。ネオクラシカル・リアリズムは、具体的に独立変数としての国際システムをいかに分析しているのか、また次節で、媒介変数としての国内政治や個人の要因をいかに分析に落とし込んでいるのかという問題も明らかにしたい。

国際システム・レベルの変数として代表的なものは、ウォルツのネオリアリズムと同じく、国際システムにおける構造的要因のうち国家間の力の分布である。ネオクラシカル・リアリズムの場合、具体的に誰の議論が該当するかというと、特にウォルフォースやシュウェラー、レインなどの分析である。彼らは、ネオリアリズムと同じく、力の分布を独立変数としてまず理論を構築している。他方で、クリステンセンの理論の独立変数は、安全保障を獲得するために国家のパワー・リソースの動員を必要とする国際的課題である。国際的課題とは、国際システムにおいて国家が他国から受ける脅威を意味する。このように、ネオクラシカル・リアリストたちの間で変数の設定は厳密には異なる。そのため、ネオクラシカル・リアリズムの理論を扱う際には、注意が必要である。以下では、ネオクラシカル・リアリズムの理論における独立変数の取り扱いをより具体的に見てみたい。

たとえば、ウォルフォースは、一九九三年の『捉え難いバランス』で、パ

ワーは完全に捉え難い概念であることをまず指摘する。ウォルフォースは、物質的な勢力均衡や力の分布と、政策決定者が認識するそれらは完全に一致しないことを主張している。さらに、力の分布を基礎においた理論では、システムにおける極の数はパワーをいかにして“計算”するかによって変化する。こうして、ネオリアリズムのように厳密な理論で使用されるパワー自体が、捉え難い概念なのである、と主張されるのである。ウォルフォースの論理では、独立変数が勢力均衡を導く力の分布であり、それを歪めてしまう媒介変数が政策決定者の認識・誤認であるということである (Wohlforth, 1993; Rose, 1998: 157-160)。

シュウェラーも、一九九八年の『致命的なインバランス』で、第二次世界大戦のドイツの開戦に関して、まず国際システムのレベルから分析を行ない、それに加えてヒトラー個人に焦点を当てた分析を試みている。システム分析(大国の相対的な能力の計算)にあたって、シュウェラーは「戦争の相関因子 (Correlation of War; COW) プロジェクト」のデータを使用している。COWの能力の計算は、軍事力、工業力、そして人口の三つの要素から求められる。シュウェラーは、求められた大国の能力を〇.〇〇から五.〇〇までの数値に変換し、比較することで、国家間の相対的な力の分布を計算している。シュウェラーは、第二次世界大戦のヨーロッパはドイツ、ソ連、イギリス・フランスの三極の構造であったため、不安定であった、と主張している (Scweller, 1998: esp. 24, 168; 2006; Rose, 1998: 157, 161, 164-165)。またシュウェラーは、対外政策の十分な理論は、国家の目的や利益という要因を含むべきである、と論じている。国家が現状維持国家か現状変革国家か、つまり国際的な戦利品だけでなく「威信や資源、システムの原理」の既存の分布に満足しているのか、不満なのかを判断する基準として操作化されるのである (Scweller, 1998: 19-26; Rose, 1998: 164-165)。

さらにレインも、二〇〇六年の『幻想の平和』で、一九四〇年代以降のアメリカのグラント・ストラテジーは、防御的リアリズムや攻撃的リアリズムでは説明できない、と主張している。レインは、この問題を解決するにあ

たって、ネオクラシカル・リアリズムのアプローチをとる。レインによると、アメリカの域外覇権 (extra-regional hegemony) の追求は、国際システムにおける力の分布と国内要因の媒介変数との間でのリンケージによって引き起こされるという。要するに、アメリカの域外覇権の追求は、国際システム・レベルの力の分布だけでなく、アメリカの経済的な膨張と「門戸開放 (open door)」のイデオロギーを加えた三つの変数で説明できて、かつこれらの変数は相関関係にあると想定されるのである。こうしてレインは、アメリカのグランド・ストラテジーを説明する理論の独立変数として、国際システム・レベルの構造的要因である力の分布をまず位置づけている (Layne, 2007)。

レインは、アメリカの域外覇権の追求は基本的に国内レベルの要因によって決定されているが、アメリカがこの戦略で成功を収めるための条件として国際システムに関する三つの要因があることを指摘している。第一に、国際システムにおけるその他の主要国に対して、圧倒的な相対的なパワーの優位が必要だということである。第二に、増大するパワーは多くの場合、強力な敵対者に直面しない地域で拡大するため、アメリカとヨーロッパとの間の力の分布は決定的にアメリカ優位の方向へ傾いているということである。そして第三の前提条件は、西半球におけるアメリカの地域覇権である。こうして、レインの理論では、あくまでも国際システム・レベルの力の分布が理論の出発点となっている (Layne, 2007)。

しかしながら、レインはネオリアリストや攻撃的リアリスト、防御的リアリストと異なり、政策決定者がいかにしてアメリカの国益を理解し、そしてそれらの国益に対してどのような脅威を認識していたか、という媒介変数を導入している。その上で、相対的なパワー分布上ではアメリカは脅威に晒されていないにもかかわらず、アメリカの価値観が脅威を受けていると認識した結果、アメリカは域外覇権を求めると主張するのである (Layne, 2007)。

他方で、クリステンセンは、一九九六年の『有用な敵』で、理論のモデルを構築するにあたって、国際システムの力の分布を直に独立変数に設定していない。クリステンセンの国内動員モデルは、国家が直面する国際的課題が

変化するリアリズム—ネオクラシカル・リアリズムの“発見” (上)

独立変数、それに対応するための戦略が従属変数で、これらを結びつける重要な媒介変数から構成され、国家が社会に対して動員を働きかける能力を扱うモデルである。このモデルでは、エリートが選択する政策は媒介変数の値によって決定される。動員に対する政治的な障害が比較的より低い場合には、国家をブラックボックスとして扱うリアリストと同一の政策が採用される。こうして、クリステンセンのモデルの場合は、国際政治の環境が独立変数であると言える (Christensen, 1996)。

リップスマンとタリアフェッロ、ロベルは、国際システムの極と戦略的環境の性質の相違を軸に、表2の通り、四つの事例を挙げる。

またリップスマンとタリアフェッロ、ロベルは、国際システム上の明快さと戦略的環境の性質を軸に、表3の通り、四つの事例を挙げる。

表2 極と戦略的環境の性質の事例

		戦略的環境の性質 (自由放任か制限的か)	
		自由放任の戦略的環境	制限的な戦略的環境
極 (大国の数)	多極	ナポレオン戦争後のイギリス、ロシア、オーストリア、プロシア (1815-1854年)	ドイツ統一戦争後のイギリス、ロシア、フランス、オーストリア = ハンガリー (1871-1892年)
	双極	アメリカと冷戦の後期 (1945-1963年)	アメリカの冷戦の後期 (1963-1989年)

出典: Ripsman, Taliaferro, and Lobell (2016: 54)

表3 国際システム上の明快さと戦略的環境の性質の事例

		戦略的環境の性質	
		制限的な戦略的環境	自由放任の戦略的環境
国際システム上の明快さ (高いか低い)	高い明快さ	アメリカ (1945-1947年)	大英帝国 (1936-1939年)
	低い明快さ	アメリカ (1990-2001年)	大英帝国 (1933-1934年)

出典: Ripsman, Taliaferro, and Lobell (2016: 55)

四 ネオクラシカル・リアリズムと媒介変数としての国内・個人要因

(1) 媒介変数としての国内要因

次いで、ネオクラシカル・リアリズムがいかに国内レベルの要因を理論に落とし込んでいるのか、という問題である。

シュウェラーは、『致命的なインバランス』で、国内政治で政権が脆弱である場合、脅威に対して効果的な対抗措置としてbalancing行動をとることができない、と主張している。政策決定者の観点からすれば、パワーが優越している相手に対してbalancingすることは、潜在的な政治的コストと不確実な政策のリスクを抱えてしまうことになる。特に大衆政治の時代では、軍事的手段や同盟によるbalancing行動を実行するためには非常に多くの政治的アクターを動員する必要がある。このため、政治的エリートたちはbalancing行動の国内的なコストをその他の政策と比較するようになる (Scwheller, 1998; 2006; Rose, 1998: 161)。

これらの政策のうち、シュウェラーは、特に不完全なbalancing (underbalancing) のような不完全な対応 (underreaction) に着目している。シュウェラーによると、国家が相対的なパワーの危険な変化に対して不完全な行動をとってしまう理由は二つあるという。第一に、アクターの選好がbalancing行動を打ち出すことに否定的な場合である。この選好は主に国内政治によって影響される。第二に、balancing行動をとることの潜在的な国内政治上のリスクとコストが非常に高い場合である (Scwheller, 1998; 2006)。

シュウェラーの理論では、独立変数は地政学的リスクと機会となる。これらの変数は、物質的な国際システムの分析によって求められる。こうして、シュウェラーの理論の独立変数は国際システムのレベルにある。同時に、シュウェラーは、媒介変数として国内レベルの要因を考慮に入れている。シュウェラーによると、媒介変数は四つの要素からなるという。つまり、第一に、エリートの合意 (コンセンサス)、第二に、政治体制の脆弱性、第三に、社会の結束の度合い (分裂していないかどうか)、第四に、エリートの

結束の度合い（分裂していないかどうか）である。エリートのコンセンサスと結束の媒介変数は、バランス行動をとる意志に対して重要な役割を果たす。また、政治体制の脆弱性と社会の結束の媒介変数は、バランス行動をとるための資源を抽出・動員する政府の能力に影響を与える。国際環境から対外政策へ至る論理のプロセスに関しては、まず相対的パワーの変化が議論の出発点となっていることが特徴である。相対的なパワーの変化は、脅威に対するエリートのコンセンサスと結束に影響を与え、政府の脆弱性と社会の結束の関数としての動員の程度によって政策が左右され、対外政策の継続あるいは変化に影響を及ぼすという流れになっている（Scweller, 1998; 2006）。

クリステンセンの『有用な敵』での国内動員モデルは、動員に対する政治的な障害の高低を決定する媒介変数が存在する。政治的な障害の高低は、三つの要素によって決定されるという。第一に、政府が税金のレベルを上昇させ維持する能力である。第二に、歴史的な観点における安全保障政策のコストである。国際的な課題の性質と即時性、そして過去に同様の挑戦を受けた時の対応を比較した結果、指導者が選択した政策のコストを意味する。第三に、選択したグランド・ストラテジーの政策に関する目新しさと顕著な歴史があることである。政策の目新しさと歴史の教訓を意味する（Christensen, 1996）。

この政治的な障害を上下させる媒介変数を、クリステンセンは「国家政治パワー（national political power）」と呼んでいる。国家政治パワーとは、政府の指導者が安全保障政策の主導権を裏づける国家の人的、物質的資源を動員する能力のことである。クリステンセンによると、国家（state）とは政府（government）に所属するエリートたる対外政策の指導者たちから構成されている。こうして、国家を単一のアクターとして見るのではなく、いくつかのアクターからなる存在とみなしていることが特徴である（Christensen, 1996: esp. 11, 13; 1997; Rose, 1998: 161, 163-164）。クリステンセンによれば、ネオクラシカル・リアリズムは、「国内政治が重要であることをただ主

張するだけではなく、国内政治が重要となる条件を明細かつ具体的に指摘する」のである (Christensen, 1996: 252)。

ウォルフォースによれば、「国際政治の変化についてのいかなる現実主義の議論も、国内レベルと国際レベルの分析を結びつけなければならない。(純粹に構造主義の) 現実主義の説明では、まさになぜ特定の国家の国内政治、社会、経済の制度が、競争する国家の制度と比較して衰退するのかについて包括的な説明を提供することができない」(Wohlforth, 1995: 19)。パウエルも、体系的な理論は必然的にまず国家の選好と行動についての重要な前提を含まなければならないため、「国際政治の理論」のみについて議論することがはたして有益なのか、また可能なのか、疑問を呈していた (Powell, 1994)。エヴァンジェリスタによれば、「国際関係論でおそらく最も見込みのある進展は、対外政策のために国内的な要因で説明しようとする研究者たちの間で、国内要因の説明がまだ不十分である、という認識の広がりである。多くの研究者たちが、国際システム・レベルの要因を自らの説明に組み入れなければならないこと、さらに『すべてが重要である』とただ主張するのではなく、より体系的な方法でそうする必要のあることを理解している」という (Evangelista, 1997)。

ザカリアは、一九九八年の『富から力へ』で、一九世紀後半のアメリカの拡大政策は防衛的リアリズムで説明できない、と主張する。ザカリアによれば、防衛的リアリズムの理論では、アメリカが外国からの脅威に晒され、安全保障上の懸念が高まる場合に、アメリカは対外的に攻撃的になるであろう、と予測される。しかしながら、当時のアメリカは対外的な脅威が必ずしも高かったわけではないにもかかわらず、領土や権益を拡大していた。このため、ザカリアは国際システム・レベルの要因だけではなく、ユニット・レベルの要因にも着目している。こうして、ザカリアの理論は、結果的に国内政治のダイナミズムで国家の対外政策について説明を試みるものである (Zakaria, 1998: esp. 5, 9-12; Rose, 1998: 162-163)。

ザカリアは、この時代のアメリカの拡大を説明できる理論として、国家中

心リアリズム (state-centered realism) を提唱している。この理論によると、政治家たちが政府のパワーではなく、国家のパワーの相対的な上昇を認識した場合、彼らは対外的な国益を拡大する政策を採用するであろう、と予測される。ザカリアによると、政府とは中央政府を、国家とは政府のコントロールによって変化できる経済と社会、国民を内包するより広い存在を意味している。国家のパワーとは、政府のパワーと国家の強さの関数であり、国家が強ければ強いほど政府のパワーから能力を引き出せるのである、ということである。ザカリアによると、国家のパワーは四つの指標から測定される。つまり、第一に国家の責任の範囲、第二に国家の自律性、第三に政府の富から徴収する能力、第四に意思決定機関の凝集力である。これらの指標がいずれも高い場合、国家のパワーは強く、対外的な拡大政策をとる傾向が高いという理論が国家中心リアリズムである (Zakaria, 1998: esp. 9-11, 13; Rose, 1998: 162)。

ネオクラシカル・リアリズムは、ネオリアリズムに比べると理論の簡潔さと洗練さを犠牲にしている。これに対して、ネオリアリズムのような国際システム・レベルの要因のみで説明する理論は、考慮すべき要因を極力少なくするように設計されている。このため、理論を使って予測をすることが複雑な理論に比べてより容易である。しかしながら、ネオクラシカル・リアリズムは、理論の簡潔さと洗練さを犠牲にして理論の運用が難しくなる欠点を引き受ける代わりに、簡潔で厳密なリアリストの対外政策理論を作り出す国際システムの制約だけでなく、ユニット・レベルの変数を理論に導入している。なぜならば、政治家は国際システムの制約に影響されるだけでなく、国家の構造の結果による制約にも直面するからである。ここで注意すべき点は、ネオクラシカル・リアリズムとユニット・レベルの要因のみで説明を試みる第二イメージ論のアプローチとは論理構造が異なるということである。こうした結果、還元主義批判を避けることが可能になり、理論の正当性を守ることができるのである (Taliaferro, Lobell, and Ripsman, 2010: 19-22)。

(2) 媒介変数としての個人要因

次いで、ネオクラシカル・リアリズムがいかに個人レベルの要因を理論に落とし込んでいるのか、という問題である。

ネオクラシカル・リアリストたちのなかには、国内政治の要因ではなく、政策決定者に分析の焦点を特に当てるリアリストもいる。言い換えると、ウォルツの提唱したレベル分析のうち、第一イメージ（個人レベル）を中心に対外政策を分析するリアリストということである。たとえば、ウォルフォースの研究は、対外政策を説明するための要素として、個人の認識レベルの要因を取り入れている。ウォルフォースのようなネオクラシカル・リアリストが導入した媒介変数は、特に政策決定者の認識・誤認である。国際システムの構造的な制約要因（第三イメージ）は、対外政策を生み出す過程において必ず、この媒介変数によって“間接的に”変換されるという。端的に言えば、政策決定者が認識する力の分布と、物質的な力の分布が必ずしも一致しないということである（Wohlforth, 1993）。たとえば、ウォルフォースによれば、一九七〇年代後半から一九八〇年代はじめに、ソ連の指導者たちは相対的な衰退の程度をいかに評価し、かつレーガン政権の軍拡がレーガン政権に独特のものなのか、それとも「ブレジネフ・ドクトリン（制限主権論）」とソ連軍のアフガニスタン侵攻、第三世界でのクレムリンの革命勢力への支援に対するフィードバックであったのかの差異をいかに識別するのかのディレンマに直面していた（Wohlforth, 1993: 182, 223-251, 294, 301-302, 306-307; 1995: 8; Rose, 1998: 159-160）。

レインの『幻想の平和』によると、一九四〇年代以降におけるアメリカの域外覇権の追求は、すでに見た通り、国際システム・レベルの力の分布とアメリカの経済的な膨張、そして「門戸開放」のイデオロギーの三つの変数で説明できるという。アメリカ外交史における「門戸開放」説を採用することで、政策決定者がいかにアメリカの国益を理解し、それらの国益に対していかなる脅威を認識していたかについて説明できると主張している。つまり、

レインも第一イメージの要因をネオクラシカル・リアリズムにおける媒介変数として使用しているのである。レインによると、アメリカのグランド・ストラテジーの目的は、門戸が開放された世界を創造することである。換言すれば、国際システムや世界秩序を開放し、アメリカのリベラルな価値観と制度を受け容れる状態にすることである。さらに言うならば、アメリカが経済的に参入できるように門戸を開放することにあるという。このため、門戸が開放された世界を支えるためには二つの要因が必要になってくる。第一に、経済的な門戸開放であり、国際経済システムを開かれた状態に維持することである。第二に、政治的な門戸開放であり、自由民主主義を海外に“拡大する (enlarge)” ことである (Layne, 2006)。

これら二つの要因は、政策決定者が「アメリカ流の生活方式」と呼ぶアメリカの中心的な価値観が海外で脅威に晒される、という認識と“連関・連結 (linkage)” している。このため、アメリカのグランド・ストラテジーは門戸開放による前提条件を基礎につくられているということである。具体的に言えば、その前提条件とは政治的かつ経済的な自由主義が海外において安全でなければ、政治的かつ経済的な自由は自国において繁栄しないということである。そして、結果的にアメリカの域外覇権の追求は、基本的に国内要素である門戸開放が原因となるのである、というのがレインの主張である (Layne, 2007)。

ネオクラシカル・リアリズムを“発見”したローズも、国内政治状況を組み込んだネオクラシカル・リアリズムのアプローチから、二〇一〇年に『終戦論』を残し、二〇世紀以降アメリカが関与した大規模な戦争を網羅している。二つの世界大戦と二つのアジアでの戦争 (朝鮮戦争とヴェトナム戦争)、二つの中東での戦争 (湾岸戦争とイラク戦争)、そして現在も進行中のアフガニスタン戦争である (Rose, 2010)。

第一次世界大戦に際して、ウィルソン大統領はドイツの民主化を提唱したが、その意味を十分に吟味していなかった。そのためもあって、不安定なワイマール共和国からヒトラーが台頭し、第二次世界大戦の勃発へとつながっ

た。朝鮮戦争は捕虜の返還問題で停戦が難航するが、核兵器の使用の示唆も含めて、アメリカは圧倒的な力による威嚇で敵に譲歩を迫った。この成功体験が、ヴェトナム戦争では仇となる。ブッシュ・シニア政権は湾岸戦争にほぼ完勝したが、首都のバグダッドまでは進軍せず、フセイン体制の瓦解を楽観視した。W・ブッシュ政権はそのつげを払おうとしたが、ずさんな戦後復興計画で事態を一層混乱させた。こうして歴史の教訓の誤用を丹念に読み解いていく姿勢は、歴史家のメイの『歴史の教訓』を想起させる (May, 1975)。

『終戦論』を書評した村田晃嗣によれば、「戦争は愚者でも開始できるし、実際、しばしば愚者が開始する。だが、それを終わらせるのは賢者の務めである。これほど重要で困難なテーマであるにもかかわらず、個別の戦争の終結についてのものを除けば、終戦に関する本格的な著作はきわめて乏しい。体系的なものといえば、フレッド・イクレ (元米国防次官) の『紛争終結の理論』(一九七一年) まで遡らなければなるまい。…アメリカ一國主義の限界はあるものの、貴重な『賢者の贈り物』である」という (『日本経済新聞』二〇一二年九月三〇日)。

五 ネオクラシカル・リアリズムの可能性と限界

(1) ネオクラシカル・リアリズムの可能性

ネオクラシカル・リアリズムのアプローチをとることで、これまでの古典的リアリズムやネオリアリズムの欠点を補うことが可能になる。古典的リアリズムは、人間の本性を理論の前提に置き、国内要因あるいは個人レベルの要因から国家の対外政策を説明しようとするが、分析レベルの還元主義や循環する論理など、理論の組み立て方に問題があった。また、ネオリアリズムは国際システム・レベルの要因から国際政治の説明を簡潔にすることを可能にするが、特定の国家の対外政策を詳細に説明することができないという欠点がある。

攻撃的リアリズムは、ウォルツのネオリアリズムと同じく、国際システム

を中心に国家の行動を説明するが、ミアシャイマー自身が指摘しているように、国際システム以外の誘因が国家の行動を規定してしまうことがある点は見過ぎていない。防衛的リアリズムは、国際システム・レベルの要因とユニット・レベルの要因をそれぞれ独立変数に設定しており、古典的リアリズムとネオリアリズムの欠点を補ってはいるが、特定の国家の説明に国際システムの分析とは別の形で国内要因を加えるため、“後づけの”理論であるという批判は免れない。

ネオクラシカル・リアリズムは、これらの欠点を補う理論である。ネオクラシカル・リアリズムは、国際システムの構造的要因を独立変数にまず置くことで、古典的リアリズムの欠陥である還元主義や循環する論理を回避している。さらに、ネオクラシカル・リアリズムは、ネオリアリズムあるいは攻撃的リアリズムとは異なり、ユニット・レベルや個人レベルの要因を媒介変数として理論に導入することで、特定の国家の対外政策に対してネオリアリズムよりも詳細な分析が可能になる。また、防衛的リアリズムの欠点である国際システムと国内レベル・個人レベルの変数の位置づけに関しても、ネオクラシカル・リアリズムは国際システムを独立変数として、国内レベル・個人レベルの要因を媒介変数として設定することで、変数の相互関係を明らかにしている。因果関係の論理構造が違うのである。

ネオクラシカル・リアリズムが注目された理由は、特定の国家の対外政策やグラント・ストラテジー、戦争について詳細に説明することが可能だからである。国際システム・レベルの構造的要因から国際政治の説明を試みるウォルツのネオリアリズムは、すでに見た通り、特定の国家の対外政策や歴史的な出来事を説明する理論ではない。このため、ネオリアリズムでは特定の国家の対外政策やグラント・ストラテジーについて説明することが困難であった。この点は、ウォルツも認識していた。これに対して、ネオクラシカル・リアリズムは、国際システムを説明するような「国際政治の理論」ではない。特定の国家の対外政策や個別の歴史的な出来事を説明するために構築された理論である。「対外政策の理論」なのである。このため、ネオクラシ

カル・リアリズムは、国家の行動に対して説明できる範囲が広いというメリットがある。

こうして、ネオクラシカル・リアリズムでは、基本的に国際システム・レベルの力の分布が独立変数であり、この独立変数を理論の従属変数である国家の対外政策へ“翻訳”する媒介変数こそが、国内政治や個人の認識・誤認の要因である、という論理になる。こうした因果関係の論理構造はネオクラシカル・リアリストたちに基本的に共通する点である。

しかしながら、これまで見てきた通り、媒介変数をいかに設定するのかが議論の分かれるところである。たとえば、ザカリアは国家の力を、シュウェラーは国内の凝集力を媒介変数として設定している。こうして、ネオクラシカル・リアリストたちの変数の設定にはばらつきが見られる。

ただし、彼らの媒介変数の違いは互いに排斥し合うものではない、と考えられる。なぜならば、国内政治や個人の認識・誤認の要因は数多くの要素によって構築されるからである。ネオクラシカル・リアリストたちが挙げた媒介変数は、数あるユニット・レベルあるいは個人レベルの要因のなかから、いくつか拾い上げたと考えられるからである。ということは、ネオクラシカル・リアリズムは媒介変数の選択次第で、説明できる範囲や対象を変えることが可能になるという利点が存在するのではないか、と肯定的に評価することが

表4 システム上の明快さの程度と戦略的環境の性質による媒介変数のクラスター

		システム上の明快さ（高いか低いか）	
		高い明快さ	低い明快さ
戦略的環境の性質 (制限的か自由放任か)	制限的な環境	指導者のイメージ と戦略的文化	指導者のイメージ と戦略的文化
	自由放任の環境	戦略的文化、 国内制度、 国家と社会の関係	不確定— 四つすべてのクラスターが 密接に関連する。

出典: Ripsman, Taliaferro, and Lobell (2016: 95).

できる。ネオクラシカル・リアリズムは、実証可能な単一の理論やモデルではない。さまざまなバリエーションがあり、説明能力が高い理論群である。

(2) ネオクラシカル・リアリズムの限界

他方で、ネオクラシカル・リアリズムは、ネオリアリズムの利点として指摘される理論の簡潔さを犠牲にしていることは否めない。つまり、ネオクラシカル・リアリズムは理論の変数を増やすことで説明の幅を広げる試みであるが、その代償として少ない変数で核心部分を説明できる能力を捨て去ってしまっている。このため、理論をもとに未来を予測し、処方箋を提示することが難しくなる可能性は否定できない。なぜなら、国内政治や個人の認識・誤認の要因は力の分布に比べ正確な分析がさらに難しいからである (Rose, 1998: 166; Legro and Moravcsik, 1999)。ネオリアリズムは力の分布のみで説明するため、理論的分析から得られる処方箋も容易であった (しかし、短期的な予測はほとんど当たらない [Waltz, 1993; Mearsheimer, 1990])。

これに対して、ネオクラシカル・リアリズムは、国内政治や認識・誤認の変数を把握しなければ、理論上、予測や処方箋を提示することはできない。そのため、ネオクラシカル・リアリズムは、特定の国家の対外政策やグランド・ストラテジー、戦争など個別の歴史的な出来事を分析し説明することに秀でているが、ネオクラシカル・リアリズムによる予測や処方箋に関する能力はネオリアリズムに劣っていると考えられる。つまり、ネオクラシカル・リアリズムは詳細な説明能力を獲得する代わりに、理論をもとにした予測や処方箋を提示する能力を捨て去ってしまったのである。この点が、ネオクラシカル・リアリズムの大きな欠点であると考えられる。ただし、未来を予測することはそもそも、社会科学の国際関係論の仕事ではない、ということもできる (Gaddis, 1992: chap. 8)。

リップスマンとタリアフェット、ロベルはネオクラシカル・リアリズムについての論文集で、ネオクラシカル・リアリズムは、これまで想定されてきた以上に、より一貫したリサーチ・プログラムであり、その説明範囲は予想

されるよりも広い、と結論づけている。ただし、あらゆる状況下でも、特定の国家の特定の対外政策を説明できるわけではない。脅威と政策の反応についての情報がそれぞれ明確か不明確かで、表5の通り、分析対象として四つの世界を想定できるという (Scweller, 2003; 2006; Sterling-Folker, 1997)。

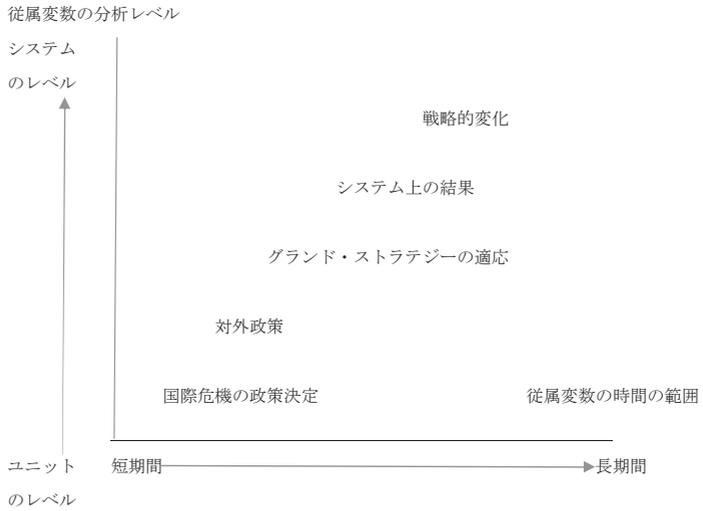
表5 ネオクラシカル・リアリズムと四つの世界

	脅威についての明らかな情報	脅威についての不明確な情報
	世界 1	世界 4
政策の反応	リアリズムに一致。	リアリズムと不一致。
についての	国内のアクターは通常、	国内のアクターは国益を決定しうが、
明らかな情報	政策のスタイルとタイミング に影響を及ぼす。 ネオクラシカル・リアリズムは、 機能不全の行為を説明する 上でのみ有用である。	政策の反応は国際制度によって 大いに決定づけられる。 ネオクラシカル・リアリズムは、 国家の行為を説明する上で 有用ではない。
	世界 2	世界 3
政策の反応	リアリズムに一致。	リアリズムと不一致。
についての	国内のアクターは、政策の	国内のアクターは国益とそれに対する
不明確な情報	スタイルとタイミングだけでなく、 国際的な課題に対する政策の反応 性質にも影響を及ぼすことができる。 ネオクラシカル・リアリズムは、 国家の対外政策の選択肢を 説明する上で有用である。	政策の反応を決定づける上で役立つ。 国内政治理論は、 国家の行動を説明する上で、 ネオクラシカル・リアリズムよりも 有用である。

出典: Ripsman, Taliaferro, and Lobell (2009: 283).

リップスマンとタリアフェッロ、ロベルは、従属変数の分析レベルと時間の範囲を軸に、従属変数の範囲を、図2の通り、図式化している。

変化するリアリズム—ネオクラシカル・リアリズムの“発見”（上）



出典: Ripsman, Taliaferro, Lobell (2016: 110)

図2 従属変数の範囲